童心の教育

守安了

一　童心

五歳の長女と四歳の次女とが、二階の間で大笑いをしながら遊んでいる。其の樣子が、いつもとは非常に違つて、何だかひどく愉快ならしい。そつと二階の上り口から二人の樣子を見た。

幼稚園から粘土をもらつて來たらしく、其の粘土を兩手でもんでいる。すると長い棒になつてたれ下る、それがもう二人にはおかしくてならないらしい。そして棒になつた粘土で卓の角をたたく。すると粘土の棒が一ぺんにぐにやつと曲がる。之がおかしい頂點で、轉げ廻つて笑つている。卓も壁も泥だらけにしているし、手も衣類も、顏や頭にまで泥をくつつけて笑い顚いでいる。

年寄りが見たらそれこそ大目玉の場面である。しかし二人の子供としては一大發見をして且つそれが滿足の頂點に在る。雜念は微塵もない。全精神を集中して、私がすぐ見をしていることすら氣付かない。大人の目で見ては、他愛もない此の一事が、彼等の全神精を奪い切つているのである。之が童心の世界であつて、大人の世界とは全然別個のものである。

童心とは、さざれ石が巖となり、そして苔がむすことを、一點の疑念もさしはさむことなく無條件に肯定する心であり、十字架上の聖者が復活することに、何の疑惑もなく信じ切る心である。況や不治の病も立ち所に全治し、不起の足なえも起ち、盲目が明き、親の唖で打身の瘤が引込めば、御飯粒をこぼせば目がつぶれる心である。

一切の萬物に靈ありとする心、即ち石木虫魚に至る迄、一切の事物に自己と同じ人格を認める心であるから、一切平等、自他同格、相對を超脫し絕對に生きる心である。故に愛憎別なく、喜悲一如、利害に捉われず自由不羈である。

一本の竹切れも、之を打ち振れば、三軍に將ともなれば、水火風雷を起す魔法の杖ともなり、又之に打ちまたがれば一瞬にして千里を馳せる名馬ともなる。お月樣とかくれんぼも出來れば、浦島となつて乙姫樣とも遊び、お椀の舟で京まで上ることも出來る。お釋迦樣さえも無緣の衆生という言葉を用いられたが童心の世界には無緣の言葉は不要である。

此の童心が健やかに庇護啓培せられて生長發展するときに、大科學者ともなれば大藝術家ともなり、大政治家ともなれば高德の宗教家ともなる。私達は此の尊嚴なる童心を更に掘下げて見よう。

二　童心の特性

童心の世界を大人の世界（歌を忘れたカナリヤとなつている大人）から觀る場合、顯著な特性が認められる。

（1）清浄無垢

喜悲一如、愛憎無差別、自他同格の童心の世界は大宗教家の心境よりも清浄であり、一切の邪念なく我欲なく無垢であつて、現し世の神である。

私は五月晴れの一日、二階で讀書していたもうお晝時かと思われる頃、近所の幼稚園通いの三人連の女の子が、私の家の門の前を歸つていく。三人手をつないで道の片側によつて壞れかかつたお隣の板塀の際に並んで上の方を眺めている。

「鯉幟がゆれているね」

「あの黑い大きいのがお父さんよ」

「あの鯉幟には子供たちがないのね」

「アッ、屋根よりも高く泳ぐよ」

「勇ましいこと。アッ小山さんことの屋根の上から尻尾が見えたよ」

「皆んなで鯉幟の歌を歌おうね。三、四」

「屋根より高い鯉幟

大きな眞鯉はお父樣

小さい緋鯉は子供達

面白そうにおよいでる」

「もう一べん歌おうよ。三、四」

「屋根より高い鯉幟」

この三人の幼い清浄の世界に打たれて、歸つて行く三人を私はいつまでも見送つた。

（2）純一無雜

童心には混亂がない。白は白、黑は黑、直は直、曲は曲、照魔鏡の如く、恩に傾き讐に離れ、利欲に惑わされるが如きことは絶對にない。夫に死別れ、八つと六つと二つの三人の子供を抱え、途方に暮れた貧しき母の選ぶ道は死より他になかつた。

晩秋の田舍は秋の取入れに忙しかつた。昏時に二人の子供の手を取り二歳の子を背負うて、山の方へ上つて行く母子四人の姿を見た村人は、一人二人ではなかつた。斯くして村人達が不審を抱いて、後を追ふて山道を上つて行つたが、谷間の用水池に展開されていた悲劇は斯うであつた。

母子心中を決意した貧しき母は、八歳になる長女に因果を含めて、池の堤から母自らの手で池中に突き落した。長女はブク〳〵と泡を浮かせて、終に沈んでしまつた。

次に六歳になる長男を池に突き落そうとした。先に姉の死を目前に眺め、今自分を同じ運命に葬らんとしている母に對して、彼は母の手から逃れようとしなかつた。のみならず母の膝にシガミ着いて、

「お母ちやん、池に落さないで頂戴よ。お母ちやんのいうことなら何でもきつとききますから、池に落すことだけは許してね」

と泣いた。併し母はその手を振り切つて彼を池の中に突き落した。彼は苦しみもがきながら一度水中に沈んだが、暫くしてポッカリと頭だけが水上に浮び出た。苦しみもがく中に顏が水上に出た瞬間、一と息吸うや否や、

「お母ちやん！」

一聲母を呼んで、姿は再度水中に沒してしまつた。

姉を殺し今自分を死の恐怖と苦悶にたたき込んでいる其の相手に對して、尙且つ

「お母ちやん」

で一貫しているとは

世に子を捨てる親はある。童心は絶對に母を離れない。絶對に變らない。

（3）全一集中

童心は常に全一集中所謂「只一筋」である。

お父樣が亡くなられ、今日は其のお葬儀である。六歳になつた遺兒、羽織で父の位牌を持つて正席に着いたあどけない姿は、見る者

をして思わず眼頭を熱からしめた。

彼は今迄に見たこともない壯嚴な儀式が、何も彼も奇異であつた。其の中に正面の嚴しい僧の次の席にある僧の、前に置かれた打鐘か、彼の全精神を吸着けてしまつた。どんな音が出るだろう、一つやつて見たい、と考えたもののいかめしい儀式の中だ、はやる心をジッと押し靜めてはいるものの、彼の念慮の中には他の何物もなかつた。

待つこと久しうして、讀經しつつ僧は除ろに打棒を手にした。そして一撃、ガーン。

「やつた」

彼は絶叫した。參列の面々、悲喜同時に至つた。之が童心の特性。

（4）樂天酒脫

童心は施して滿足し求める所の欲心がない從つて苦惱も煩悶もない。常に樂天酒脫、八風吹けども不動天邊の月というべく、天空浮雲を凝げず只去來に任せるが如く、喜び到れは喜び、悲しみ到れば悲しみ、去れば忽ち平靜、凝滯執着がない。

「お母ちやん、アーンアーン、來て頂戴アーナーン」

「どうしたの、大きな聲で泣いて」

出て見ると三輪車が、石につまづいて轉んだといつて泣いている。

「もう泣かないのよ。別に怪我をしたのではないのだから」

「お母ちやん、あれ猫が。猫が松の木からブラ下つてよ」

「アレ／＼。猫が木から下りられないで困つているのよ」

「アハハハハ——お母ちやん、猫のブランコよ。おかしいね。ハハハハ……」

五歳になつた雄介ちやんには、三輪車がまだ上手に乘りこなせない。三輪車がまだ一パイ涙がたまつているのに、猫のブランコで、もう呵々大笑。大人には出來ない藝當である。

（5）明朗快活

童心は常にお天氣がよい。だから病氣の時には笑顔が病狀を判斷するバロメーターとなる。若し常に無聲な子供だつたら必ず心身何れにか異變を有している。

（6）リズム變化

リズムは童心として牛得的のものであろう物心ついた童心の活動は其の特色として何等かの形に於てリズムを伴つている。

子供が其の環境から比較的障害されることなく、所謂る「うつつをぬかし」ている場合には特に顯著に現われる。お伽噺にリズムを必要とするのも理由がある。

三歳になつた次女が、窓の下で砂遊びに熱中している。そして何だか一人で喋つている

「まるい花
　風に吹かれて
　　みないくよ
お姫樣
　家來とも
　　風に吹かれて」

（生後滿二年三ケ月育兒日誌の中より）

歌つている。此の次女を翌年夏海水浴につれて行つた。民家を一軒借りたのだが、お粗末千萬の家で、半ば破れかけた家。便所の壁が壞れているので、用を達しながら裏の畑が眺められる。次女が用便に行つたが、中々出て來ないので、そつと行つて見ると一人で何か喋つている。シト／＼と雨の降つている日で、大人も徒然に堪えられない位だつた。

「雨が降つて
　雨が降つて
　　南瓜が成つて」

（生後三年九ケ月育兒日誌の中より）

童心の世界では話も歌も一つである。

（7）好奇想像

童心の世界には不可思議はない。而して童心の世界は一切が神秘奇異である。それだけに童心に映ずる一切が不可思議であり、其の不可思議を希求しているのが童心である。と共に童心の世界は總ての判斷に進取的であり未來への憧憬が掛けられているから、現前の解釋だけでは滿足できない。必ず未來へ想像し未來への期待を熱烈に要求する。此の好奇心、想像力を適正に助長啓培する所に童心が成長發展する。

桃の中から赤ちゃんが産れ、犬猿雉子をお伴につれて、あの子供の桃太郎が大鬼を降參させるあたり、指に足りない一寸法師が、お椀の舟に箸の櫂で上京、清水坂で大鬼を追つ拂ふあたり實に童心を滿足させるに足りる。一お母ちゃん、あつちの梅の漬物の方が之よりも袂が長いのね。

それでも袂鑵だけは同じよ」

さても〳〵不思議という顏付で。

（生後四年四ケ月育兒日誌の中より）

ワタクシノオモツタコト

ワタクシ ハ オカアサン、マツノ キ デモ オハナシヲ スルノデセウカ ト キキマシタ。

オカアサン ハ サウサウ ト オツシヤイ マシタ。

サクラ ノ ハナ ガ ユレルノハ イヤイヤ ヲ シテキルノデセウ ト イイマシタ。オカアサン ハ サウサウ ト オツシヤイマシタ。

サクラ ノ ハナビラ ガ オチテ クルノハ ナミダ デセウ ト タヅネマシタ

オカアサン ハ サウサウ ト オツシヤイマシタ（等一、八月十九日）

（8）主我的だが同情的

私のお母さんよ。私のおもちやよ。私の先生よ。私のお友達よ。

童心の周圍の一切はみんな「私の」であるだから見方によれば凡てが主我的である。がしかし、童心は自他一如、自他同格なのであるから、主我的にも見得るが又凡て主他的とも謂える。

長女次女丁度年違ひなので、長女は二年保育次女は三年保育として同時に入園した。その第二年目の四月だつた。

幼稚園ではお雛祭を中心に保育されていた蓬摘みに行つて最後の仕上げは草餅を作ることになつた。

今日は其の仕上げの日でした。お蓙にお餅を戴くというので子供達は數日前から大喜びしていた。丁度此の前日から次女は風邪に冒されて缺席、其の午後姉が歸つて來て「純ちやん、お餅よ。先生が純ちやんに持つて歸つてお上げなさいつて、下さつたのよ」

「フーン。ありがとう」

お母ちゃんも

「まあ、先生がそんなにおつしやつて下さつたの、ほんとにもつたいないことね」

純子は蓬のお餅をムシヤ〳〵と食べてしまつた。併し此のお餅について、後日先生から伺つた話は斯うだつた。

仕上げの日園兒はみんな蓙のお部屋に集まつて、先生が配つて下さるお餅をおとなしく待つた。そして一同おひな樣にお禮をしてにぎやかに、はしやぎながら食べた。所が宅の浩子（長女）はお餅を食べようとせず一人キヨトンとしていた。先生は「浩ちやんはどうして食べないの」とお尋ねになつた。

「純ちゃんが風引いて休んでいるから持つて歸つてやるの」

との返事。それで先生は涙が浮んで來たそうで、

「純ちゃんの分は別にありますから、歸る時持つて歸つてお上げなさい。これは浩ちやんの分ですから、此所でお上りなさい」

それで浩子も喜んで戴いたそうだ。歸る時先生が純子の分を持たせて下さつたのだつた。

そんな出來事のあつたことを浩子もいはなければ、純子も一向に平氣で食べてしまつたら、それでおしまい。（育兒日誌の中より）

恩がましくも云わず、義理に着ることもなし、只興えて滿足、受けて滿足、之が童心。

（9）無私無欲、無道德的

童心の世界は無道德的乃至初歩道義的であつて白紙である。不道德とは異る。

だから大人の目で不道德的に見える所から童心の行爲を道德的規範から考えて叱つたりたしなめたりするのは、甚だ當らないことである。大人の方が間違つている。一つの行爲をたしなめると、此の種の次の行爲に對しても効き目があると考える大人は更に間違つている。幼兒には冗談と嘘言との別がつかないのだから、冗談は禁物である。

ケフ　ガクカウ　カラ　カヘツテ　ゴハンヲ　タベテキタラ　オカアサン　ガ　ウタバカリ　ウタウ　ノデ　ワタクシ　ハ　オコツテ、

センセイ　ガ　オベントウ　ノ　トキ　ニ　ウタ　ヲ　ウタツテハ　イケマセン　トオツシヤツタ　ノダ　ト　ジヤウダン　ヲイヒマシタ。ソシテ　ワタクシ　ハ　ホント　ノ　ウナ　カホ　ヲ　シテ　イヒマシタ。ソレデ　ワタクシ　ハ　オカシクテタマリマセンデシタ。

ソレカラ　ソノコトヲ　ニツキ　ニ　カイタ　ノデ　ゴホウビ　ニ　オカシ　ヲ　モラヒマシタ。（尋一、一學期）

漸く嘘言と冗談との別が芽生え初めた例である。

其の他拾い上げて見るなら隨分幾多の特性が擧げられようが、童心の概要が斯樣なものであつて見れば、その庇護哲培の一方策として、童話が選ばれる。童心に養いを與える童話は最も嚴選しなければならないことは說くまでもあるまい。現在行われている童話が果して適切妥當のものであるか否か、

"子供の日"童謠懸賞募集

主催　株式會社ソレーベル館
後援　朝日新聞社
協賛　文部省、厚生省
全保連、NHK
ビクター文藝部

一、歌詞　元氣潑溂たる子供の生育をよろこぶ歌
二、應募資格　制限せず　誰方でも應募出來ます
三、締切　二月末日
四、選定委員　倉橋惣三先生、大島課長（文部省）吉見課長（厚生省）他文藝專門家數氏
五、當選發表　四月一日付朝日新聞の外幼兒の教育、保育時報、保育の友誌上
六、應募方法　適宜用紙に歌詞を記載し住所所屬（勤先）氏名を記入本社童謠募集係宛
七、作曲　弘田龍太郎先生に依囑の豫定

△尙細詳は近く新聞紙上に發表いたします